



タイトル Title	読書空間 私が選んだ三冊：2007年の収穫本
著者 Author(s)	木村, 幹
掲載誌・巻号・ページ Citation	論座,152:312
刊行日 Issue date	2008-01
資源タイプ Resource Type	Article / 一般雑誌記事
版区分 Resource Version	author
権利 Rights	
DOI	
JaLCDOI	
URL	http://www.lib.kobe-u.ac.jp/handle_kernel/90001589

PDF issue: 2018-11-21

私の選んだ三冊：木村幹（神戸大学教授）

- 1) エイドリアン・ブゾー『世界史の中の現代朝鮮』李娜兀監訳（明石書店）
- 2) マルク・ブロック『奇妙な敗北：1940年の証言』平野千果子訳（岩波書店）
- 3) 山中優『ハイエクの政治思想』（勁草書房）

不勉強な評者が、今年、新たに読んだ本はさほど多くない。その乏しい書籍の中から、次の三冊を選んでみた。最初は、エイドリアン・ブゾー『世界史の中の現代朝鮮』（明石書房）である。オーストラリア人の著者により書かれた本書は、感情的且つ政治的に語られがちなこの地域について、俯瞰的に議論しようとする。 「入門書」であることもあり、そこに書かれている内容については、特に目新しいところがある訳ではなく、また、同じ朝鮮半島の専門家である評者としては、意見を異にするところもないではない。しかし、時に余りにも細かい事柄に捉われ無用な論争ばかりを起ししがちな、日本の朝鮮半島関係者にとって、その自由なタッチは羨ましい。

朝鮮半島ではないが、その比較としてよい視座を提供するのがマルク・ブロック『奇妙な敗北』（岩波書店）である。マルク・ブロックがフランスの著名な歴史学者であることは、よく知られているが、本書はその著者が自らの生涯の最晩年に経験した、第二次世界大戦における母国フランスのドイツに対する敗北を描いた、同時代史的著作である。本書については、既に一九五五年に既に翻訳が出ており、本書はその新訳になる。時に「最先端の」研究にばかり目が向けられがちな今日、改めて名著を一般の手に触れるようにした訳者の功績は大きなものがある。戦争に敗れて、占領下にある人々がいかにして、敗北を如何に説明し、合理化しようとしたのか、そして、そこには如何なる知識人の苦悩があったのか。自ら自身が第一級の知識人である筆者により書かれた本書は、それを多面的な形で示している。その姿は、日本植民地末期、総力戦体制下の朝鮮半島知識人の苦悩に共通するものがある。

最後に、少し傾向が変わるが山中優『ハイエクの政治思想』（勁草書房）を挙げることにしたい。21世紀も依然として注目されるハイエクであるが、本書はそれを経済学的にではなく、政治学的に読み解こうとしている。就中、その思想的変遷の描き方は見事であり、優れた政治思想史的著作ということができよう。愚直とさえ言える研究であるが、このような着実な研究を通して、我々の世界を支える「自生的秩序」の重要性とその脆弱性についてもう一度考えることこそ、安易な「改革」や、安易なナショナリズムが叫ばれる今日において、重要なことなのではないだろうか。